Japanese Journal of Applied Psychology
1997, No. 22(1), 15-36

討　論

「現代社会と父親の発達」

企　画　高　橋　たまき（日本女子大学）
司　会　高　嶋　正　士（共立女子大学）
シンポジスト　柏　木　恵　子（白百合女子大学）
花　沢　成　一（日本大学）
飯　長　喜一郎（お茶の水女子大学）

このシンポジウムは，平成９年１月25日（土）に，日本大学文理学部において行われた。本報告は，その際の録音テープをもとに，各シンポジストに字句の修正を依頼し，司会者と企画者が最終的にまとめたものである。

企画の挨拶（高橋）：皆様，本日はこのシンポジウムにご参加いただきまして有り難うございます。応用心理学会の公開シンポジウムは，毎年一度ずつ開催されております。今回は，ご案内致しましたように，「現代社会と父親の発達」のテーマのもとに企画致しました。応用心理学会の公開シンポジウムで取り扱いますテーマはさまざまございまして，昨年度は「心のコントロール」の問題が取り扱われました。今年は少し趣向を変えて，発達心理学的な観点から取り上げてみることに致しました。その中でも本日のテーマは「親子関係」の領域に含まれると思われます。以前の親子関係のみかたは，親の育て方や養育態度が，子どもの知的発達，認知発達など，子どもの側の発達にどんな影響を及ぼすかというふうであったと思います。あくまでも，親の育て方・養育態度が先行条件，子どもの発達はそれらを受けた結果という捉らえ方が，以前はなされていたと考えられます。そのような考え方から次第に，親の養育態度や育て方に対して，子どもの側も影響を与えているのだという，相互作用的な考え方が出て参りました。さらに最近は，生涯発達の観点から，親も発達するのだ，人は親になって，〈親〉としての発達を遂げるのだという考えが，今日ここにシンポジストとしてお迎えしている柏木先生を始めとして，この領域の第一線で活躍しておられる先生方から提示されるに至っております。そのような中でも，母親についての「母親としての発達」の考え方は，かなり強力にあったと思いますが，父親の発達に目が向けられたのは，日本ではごく最近のことではないかと思います。柏木先生がお書きになられたり，編集されたりなさったご本が沢山ございまして，ご存じの方も多いと思いますけれど，本日はそのようなことで，「父親の発達」を取り上げました。父親が発達するためには，母親がどうあるかも重要であります。そこで，柏木先生のご推薦により，母親の問題にも取り組んでいらっしゃる花沢先生と飯長先生にも，シンポジストとしてご出演願うことに致しました。司会は高嶋先生にお願いしてございます。

司会（高嶋）：司会を担当させていただきます，共立女子大学の高嶋でございます。本日３人の先生に話題提供をしていただくわけでございますが，最初私の方からちょっと申し上げておきたいと思います。このテーマを私に司会をするようにと言われました時に，私もちょっと思い出したのでございますが，私が1963年にデンバーのコロラド大学へ参りました時に，小児科の先生にこういうことを言われました。「日本はまだ，さーさーママ，まーまーパパが続いているのか」という質問をされたわけですね。さーさーママというのはご承知のように，日本のお母さんは子どもにさぁさぁさぁと何でも強制する。ところが父親はまぁいいじゃないかちょっと休んでからとい

うように，まぁまぁと抑える。ところが最近はどうも，そのまぁまぁすら言わなくなったと，まぁこういうわけでございます。とにかく本日のテーマは，男性群あるいは父親の体験をもっておられる方には，場合によっては耳の痛い話になるかもしれませんが，現代の父親の問題等に関わりますシンポジウムでございますので，最後までよろしくお願いいたしたいと思います。それで，最初話題提供で各先生方にだいたい25分をめどにお話をしていただき，その後で，自由にフロアの諸先生方からご意見等を賜りたいと，そのように思っているわけでございます。

それでは最初に柏木先生に「社会的背景と父親の発達」ということでよろしくお願いいたします。

柏木：それでは資料を使わせていただきますので，ここで話させていただきます。

大変含蓄の深い全体のテーマだと思います。社会的背景と父親ということにとどまらず父親の発達まで掘り下げるわけですから。まずは私の関心のあるところを少し話をさせていただきたいと思います。

人間という種類にとって父親というのは社会的な発明品だといわれます。母親の場合は自分が産むのですから，産まれた子どもの母親であることは疑う余地がないのですが，生物学的な父親というのは特定が不可能でありまして，そういう意味では発明品だというふうにもいわれるわけです。発明品であるということは，言い換えれば，いかようにもまたその後，変化する可能性をもっているというふうにも言えるかと思うのです。現に多様な父親の在り方，今高嶋先生もご紹介くださいましたような，多様な父親があります。最近しきりに父親についての，今日のシンポジウムもそうですけれども，日本の父親の現状についての疑義が出されていて，例えば，父親復権だとか，権威が失墜したのとかなんとかというふうなことがいわれます。そういわれるのはある意味で当然でありまして，私は別にそのことをそう悲観することでも，そう深刻がることでもないというふうに思っています。ただ，そうなった現状はなんなのか，つまり様々な父親の在り方があり得るわけですけれども，どういう状況が，条件が，その父親のありようというものを規定するのかということを少し整理して考えてみると，今ある状況がどういう問題をはらんでいるのやら，あるいはどういう変化の方向性を示唆しているのか，ということがわかるのではないかと思って，そのことからまずお話をしたいと思います。

父親，これは当然のことながら母親も関係してくるわけですけれど，母親が，あるいは父親の在り方が変わる。いろいろあり得る，歴史的にも，それからいろんな社会ごとにいろいろあり得る。一体どういう変数がそれに関与しているのか，特にいま日本の現状の中で，父親であることあるいは母親であること，また違う言葉でいえば男性であること，女性であるということが，どういう状況の影響を受けているか，ということを少し整理してみたものがこれです。

最近の日本の社会的な，経済的な状況の変化が，その母親であること，あるいは男性・女性であるというふうなことを否応無しに，こう影響しております。それがなんなのかということをまず出します。そうしますと，非常に大きく変化している要因が三つほどあげられると思います。

一つはご承知のように，寿命が長くなったことと，子どもが少なくなったこと，これを人口革命というふうにある人々は呼んでおります。この二つは，どちらも同じ原因によっているわけで科学技術の進歩，とりわけ医学の進歩に支えられているわけです。少子化というのは何も全然珍しいことではありませんで，かつても少子化の時代はありました。たくさん生まれるけどバタバタ死んでしまって残ったのは２人，という時代は200年ぐらい前まではざらにあったわけで，少子化というだけではなんにも珍しいことではないのですね。少なく生んでもその子ども達が育つという意味での少子化が，初めて到来したという意味で，大変重要な革命的な状況と言えると思うんですね。二番目は，これも科学技術の進歩と言ってもいいと思うのですけれど，産業構造が非常に工業化した。そのことが家族生活にどういう影響を及ぼしたかというと，家事が非常に省力化された。それからウチの中でなくても，外側でもできるようになった。家事の社会化といわれる現象もこれと関連しております。それからさらに，今度は労働市場の側で，かつては労働力はマンパワー，男の人の力というふうにいわれましたが，それはなぜかというと，もっぱら筋力が必要な時代であったし，それからお産なんだからといって休むことがない，そういう意味での男性の力の方が上等であったという意味で，

マンパワーといわれたのですけれども，最近の機械化，その他は労働力にそういうマンパワーは要しない。情報の理解力，操作力があればいいわけです。そういう意味で労働力の女性化ということが起こっています。

この三つの状況は，私達みんながさらされているわけですが，ただそれは世の中が変わった，便利になったということだけではなくて，私達の生活を変え，生活だけではなくて心を変えました。どういうふうに変えているかというと，一番直接的には子どもを産むことに関係しますから，女の人に関係します。寿命が長くなったのに子どもは２人ということは，母親の役割が相対的に縮小した，ごく人生の一部だけになってしまった，ということであります。さらに言えば数少ない子どもに物質的，精神的投資がされるという意味で，子どもは王様という状況が生まれております。次の家事省力化うんぬんは，その主婦の役割を離れさせました。かつては料理がうまいとか，お裁縫がうまいとかということが女の人にとっては欠くべからざる条件であり，そういうのをもっている人が周りからも評価され，本人も誇り高くいたわけですけれども，それはほとんど有用性がなくなってしまった。それから最後の労働力の女性化は，女性が労働力としての意味をもつようになった，という意味で労働市場に参入できる。このことは家族生活にはどういう影響を及ぼすかというと，経済力を獲得してその家計の中に，今までは消費側だけだったのが家計に自分もコントリビュートできる，そういう役割をもたらすことになりました。このことは全体まとめてみるとどういうことかというと，いわゆる伝統的な女性役割は縮小し，これらの母親役割主婦役割は，縮小したということであり，替わって社会的な役割が増大したということになると思います。

このことは，男の方についてはあまり言われないのですけれど，実は似たような状況が起こっています。そもそも子育てに参与していないことを考えれば，子どもによる影響は少いでしょうが，その職業生活だけでいくら昇進しても，そのことが人生のすべてではなくなり，寿命が長くなっているわけですから，その後の家族生活の期間が増大する。つまり地域あるいは家庭での家族生活というものが出てくるということと，それからこういうことが起こりますから，家事参加の可能性が増大しているということが起こります。そして労働力が女性化，ことに最近のように半数以上が，程度の差はあれ，妻が家計維持能力をもっているとなると，今までの家事維持能力は縮小するということになります。これもまとめると，要は伝統的な男性役割は縮小した。そして今まではあまり考えないでも済んでいた，家族や地域生活の比重が大きくなる。こういう変化をこの社会状況がもたらしているのですね。この二つを全部つなぎあわせてみると，男性にとっても女性にとってもそれぞれ伝統的な役割，ジェンダーの役割ということがあまり意味がなくなってきて接近してきた。両方とも家族生活もしなければいけないし，社会的な活動の可能性も実際に出来てきた。ということになりますと，これは男，これは女，という役割が，ボーダーが段々なくなってきた。で，そのことは心理学的な機能の発達の上から言うと，両方の機能をあわせもった特性を段々にもつようになってくる。こういう方向が，今の状況から考えられるというわけです。

ところで，長いこと親子関係の研究は母子研究でありましたけれども，やっと父親がLambによって発見されました。1975年，それ以降アメリカではかなり父親研究が盛んになってきております。その時どうしてそれが発見されたかというと，アメリカではご承知のように離婚が大変増えまして，そして嫌でも父親が育てなければいけない状況が増え，あるいは父親がいなくて母親だけが育てる状況が出現し，これらの実際的な疑問から父親が浮かび上がってきた，という事情があります。日本では臨床的な問題の背景としてかなり前から言われているものの，父親の研究，父親の視点は日本では少ないですね。これは，最近，『児童心理学の進歩』に，父親の研究のレビューを，大野祥子さんとしまして，過去に父親の研究はどのくらいあるのか，母親のはどうかと見ましたら，まだ日本では父親研究は微々たるものという状況であります。ただこのLambにしろ日本の場合にしろ，父親がどういうふうに発見されたかというと，子どもの発達に影響するもう一人のコントリビューターとしての父親，つまり子どもの発達に影響する者としての父親研究，だったのですね。親の例えば「躾が子どもの何とかに及ぼす影響」，そういう枠組みのなかでの父親研究というのが依然とし

て盛んだったのです。日本の場合には，母性尊重という歴史的な，また政治的な背景もあって，母親が育てるのが当たり前，良しとする，そういうことがあったかと思います。

ところで父親の現状はどうなっているのでしょうか。例えば，生活時間調査という大変綿密な調査が社会学者によって行われております。それによると，例えば家庭生活にコミットする時間というのは，女性の家事時間に比べてはるかにはるかに低い。これは国際的にも最低という状況であります。つまり先程も言ったように，段々家族生活，地域生活の必要性が増している中でも，実際はほとんど変わっていない，という状況がございます。そして専業主婦といわれる子どもの育児，家事を一手に引き受ける人の場合には，親はいるがたった一人の親と言ってもいい人の間で，後で花沢先生もお話になると思いますが，育児不安とか不満というものが高い，という問題が起こっております。では有職の主婦の場合にはそれがないかというと，家庭と職業との両立という問題は依然として女性だけの問題，働く母親という言葉がありますけれど，働く父親という言葉はないという，そういう現状がございます。

こう考えると，そもそも父親というのはやっぱり違うんだからという議論がよく出てくるのですが，私はかねてそのことに大変疑問を持っておりまして，いったい，父親と母親は本当に違うんだろうかということを，問題にした研究をしてみたことがございます。子どもや育児に対して，父親や母親がどういう感情を持つかということを調べた結果，三つの因子が得られました。第一は子どもは楽しいとか，育児は重要だというふうに，育児や子どもに対するポジティブな，肯定的な感情です。いわゆる親の愛のようなものが含まれます。それから，二番目はそれとは逆に，育児とか子どもの存在などから制約を受けている，育児不安なども含むネガティブな，あるいは否定的な感情です。三番目は，この二つとどうにも分離，一緒になりませんで独立して出てくるのですが，「子どもは自分の分身だ」，という感情です。親の子どもに対する，特に母親の子どもに対する気持ちはこんなものじゃないかと，世の中でよく言われているものがこれにあたります。

ところでこの三つの種類の感情が，いったい父親と母親でどうなのであろうかということを調べた結果があります。ご覧くださるとおわかりになるように，父親と母親は第一の肯定的な感情については全く差がありません。お母さんの方が子どもに対する愛情が強いとか，愛着が強いとかいうことはないのです。ところが，二番目の子どもや育児からの制約感，それから逃げ出したいという否定的な感情は，圧倒的に母親に強い。この二つを考えあわせてみますと，お母さんというのは，ただただ子どもがかわいい，子どもへの愛情いっぱいというのではなくて，それもあるけれども，それと逆な方向の感情ももっている。つまり非常にアンビバレントな感情をもっている点で，父親と非常に違う。父親はと言いますと，かわいい，育児は大事だ，というふうな肯定的な気持ちだけが非常に強く意識される，という状況にあります。子どもは自分の分身だという感情，これは一般にお母さんのものだと考えられ，生理的には確かに分身だといえるかもしれませんが，その感情は驚いたことに，父親の方が強いのであります。これは，意外とお思いになるかもしれませんが，私はこれをこういうふうに解釈いたします。お父さんの場合には，育児，子どもからの制約感を持つことがない。だけど制約感の強いお母さんにとって，子どもは決して自分の分身とか自分の一部ではなくて，自分と対立する存在だと受け止められて，だから自分の分身だなどと思えないんだ，というふうに。ではお父さんはなぜにこんな気持ちをもっているのでしょうか，ということをまたさらに見るために，このサンプルのお父さんが，いったいどのくらい子どもの育児，あるいはそれに関連する家事をしているかを細かく調べて得点化いたしますと，全くしない父親から，よくやる父親まで広く分布します。その中から100人ぐらいずつの，家事育児を非常によくするお父さんと，しないお父さんというのを選び出しまして，この二つの群の間では感情が違うんじゃないか，と比較してみた結果があります。前述のと何が違うか，一番注目していただきたいのは，お母さんよりもお父さんに強かった「子どもは自分の分身」という感情は，育児をしない父親で非常に強い。しない人は，子どもは分身だと，そういうある意味で大変にロマンティックな気持ちをもっていられる。する人では，そうではなくなってくるということであります。このように，父親と母親の感情というのは，ただ父だから，母だから変わるというのではな

くて，どのくらい育児にコミットするかというとことがかなり重要な要因であるらしい，ということがここから言えるだろうと思われます。要するに結論は，親の子どもに対する愛情は，産む性だから特別なものだということではない。どのくらい，育児をするか，子どもと対峙して，子ども，育児ということの苦楽を味わうか，その中で形成されるのだということなのです。Lambは父親を再発見しましたけれども，それはあくまでも子どもに影響する者としてだけ注目したのです。しかし父親に限らず，親の研究として非常に重要だと思うのは，親自身がいかに発達するか，子どもを育てるという家族役割を担うことによって，どういうふうに変化するか，という点であります。もちろん子どもが成長する中で，親自身がその過程で鍛えられ，変化するということを，皆さんご承知でいらっしゃると思うのですが，そのことが今までほとんど心理学では取り上げられていませんでした。そのことを私は大変遺憾に思っております。私は親になって何が変ったかという調査をしてみました。その結果忍耐力が出たとか，人間の人智を越えたものの存在ということがわかるようになったとか，あるいは自分というものを非常に強くもつようになったというような，親としての発達因子が得られました。そしてこれは女性の方がはるかに多い。しかも専業主婦にそれが強いのです。で，この事実をどう考えるか。一つはお父さんは育児参加が少ないから，それから専業主婦よりも仕事をもっている人の方が，時間的にも苦楽の量も少ないから，恐らく専業主婦の方が，それをたくさん回想しているのだろう，という解釈が成り立つわけですし，もう一つは，子どもを育てるのはこちらの人，育てないのはこちらの人，という分業の中での，女性の自己弁護，ラショナライゼーションというふうに見ることもできるのではないでしょうか。

さらに言わせていただきますと，親として発達することが，今，父親において非常に少ないわけですけれど，これは大変残念なことだと思います。今まで成人期の発達は，社会学の中で，職業的社会化と言われ，親として発達してなくとも特定の職業の中での変化，職業的社会化はなされているのかとは思いますけれども，それだけでは充分でないと思うのです。一番最初にご覧いただきましたように，社会状況の変化は，嫌でも家族生活を変える方向にベクトルが動いているんですね。それが変わりきらない状況の中で，今日本の家族というのは色々なきしみを見せております。例えば育児不安というのもその一つだろうと思いますし，それからそれを越えて子どもの育児だけではなくて，その家族生活そのものに対する不満というのが，男性と女性との間で大きなギャップを見せている，という事実がございます。

これも我々の調査ですが（柏木・数井・大野，1997），今結婚生活にどういう満足度をもっているか，またそれがどういうファクターと結びついているか，という研究をしております。で，その満足度の中の非常にティピカルな一つの問題がありまして，もしもう一度結婚できるとしたら，誰とするか。「今の人とする」，「もう絶対しない」，「別な人とする」，という３つの選択肢について，若い層（30代）と中高年（50－60代）の年齢層の回答を得ました。若い層は夫の側は，58％ほどが今の奥さんとすると言っておりますが，妻の側はそれより低い。さらに中高年になりますとそのズレはもっと大きくなり，中高年の男性では72％ほどが今の妻とまた結婚したい，といっているのに妻は結婚さえ否定する人が目立つというありさまです。で，これをもう少し簡単に，どんなふうにズレが大きいか，どういう生活をしている人の中で特に大きいのかということをみましょう。夫も今の配偶者と又もう一度したい。奥さんの方も今の人としたいと言っている人が，若い層の有職，無職にどれだけいるかというと，一番高いのが有職で中高年層，つまり両方とも職業をずっともち続けた層の中です。言い換えればそういう意味での結婚満足度が高い。そしてそうじゃない方は低いんですね。ちょうどその逆の妻を見てみると，夫の方は妻としたいと言っているのに，その妻の方は他の人としたい，いやもう絶対したくないと言っている。つまり不満得点はこの層で一番高い。無職というのは言い換えれば性別分業しているということ。それが，先程の図式で明らかなように，段々社会的な適正化が失われてきた。そういう中で，そういう層の中に夫婦の間の期待の違いや満足度の違いということが起きてきた，という可能性は十分考えられると思います。

別な資料ですが，なぜ女の人達がこういうふうに今の結婚生活に満足していないか，これは，私どものところの大学院で論文を書いている人の調査ですが，自分というものをどういうふうに認識するかを

出しますと，色んな側面が出てきます。家族，例えば母親としての自分，あるいは職業人としての自分，あるいはPTAの等々。それを三つの自分 ── 家族人としての，社会人及び職業人としての自分，それとも何でもない個人としての自分というふうに分けます。そして，個人としての自分というものに注目していただきますと，現状ではごく小さなものでしかないのです。ところが，理想としては，どういう配分で自分を指向してるかと聞きますと，増えるのは個人としての自分。減るのは家族としての自分，家庭人としての自分なのです。最近家族の中の個人化が言われ，特にその傾向が女性に強いといわれているわけですが，こうした結果は，先程の結婚満足度の背景に恐らくある，家庭の中で今自分がどういう地位にあるかという，認識のズレに関係しているだろうと思われます。

90年の総理府の調査によると，家庭の中での男女の地位はどのくらい平等だと思うかということについて，既婚層では，男性の側は平等になっているという人が過半数を越えていますが，女性の側はその逆で，平等にはなっていない，こういうギャップが非常に大きい。この辺が先程の平等感の反対，結婚満足度にジェンダーギャップがあることの背景であり，そして個人化を求める女性の指向ではないか。このことは，父親とは無関係かのように思われるのですけれど，実は父親ということは，同時に男性であり，あるいは一人の個人であるわけで，どういう生活をしているかということは，既婚者の場合，相手とどう生活するかということと密接に関係がある。そういう意味では父親のことを少し逸脱するかに見えますが，私は発達を考える時には，このように多面的に見ることが必要ではないかと考えております。

司会：どうも，ありがとうございました。柏木先生からは，今お話のございましたように，過去現在未来にわたって，どういうふうにあるべきかというようなことを，主に貴重なデータを基にしてお話ししていただきました。それでは次に日本大学の花沢先生から，「母性研究から見た父親の発達について」をお話しいただきます。花沢先生はご承知のように，妊産婦のご研究をずっと続けておられまして，特にサイコソマティックな面からの研究もいくつかお持ちでございますので，その面からご意見を賜りたいと思います。どうぞよろしく。

花沢：只今柏木先生のお話を承っておりまして，もう本日のシンポジウムは柏木先生のお話で充分じゃないか。私の言いたかったこともおっしゃってくださっていますし，私の時間などは，全部柏木先生の方におまわししたいような気持ちでございますけれども，一応私が，母性研究の立場からという，柏木先生からのご推薦もございますので，限られた時間でございますけれど，少し発言させていただきたいと思います。

今高嶋先生からもお話ありましたように，私は母性の中でも，特に妊産婦さん中心の研究を進めております。ですから，話は少し狭くなってしまうかもしれませんけれども，できるだけ，そこを広げてお話ししてみたいと思っております。

最初にその私のささやかな研究の範囲を越えないようにお話ししてみたいと思います。やはり私は父親ということになると，すでにもう柏木先生の中に色々とお話が出ておりますけれども，改めて父性ということからちょっと考えてみようかと思います。というのは，私は母性の研究から始めたわけですが，その母性という言葉自身が誠に曖昧な言葉でありまして，今でも定義が定かではない。ますます定義がおかしくなってきている，というような現状でありまして，そういうところからも，父性という言葉がどうかということも，今後考えてみる必要があろうかと思って，そこから話をまた始めさせていただこうというわけであります。

まずその母性父性ということですが，母性，先程柏木先生が母親の研究は従来よく行われたと話されましたが，私も20年ぐらい前から母性の研究を始めました。その20年ぐらい前は母性の研究というのは，ほとんどないと言っても過言ではないのでありまして，世界の文献を探してもシステマティックな研究はほとんどない。そこで，やむを得ず私が始めたわけなのですが，その最初の段階でまず母性，motherhood って何だろうというわけで，少し調べてみたわけであります。最初に取り上げましたのは『広辞苑』ですが，現在第四版が出ておりますね。『広辞苑』の前に『辞苑』というのがございました。これは戦前の，中高年以上の方ですとご存知なのですけれども。私は手元に昭和10年のを持っておりました。『辞苑』を引っぱり出しまして，なんとあるだろうかと調べたところ，母性とは「女性が母としてもっ

ている感情・理性・意志・性格・肉体等の特徴の総称」とありました。これを私が見た時に，すごい解釈しているなと，ちょっとびっくりしたのですけれども，現代の『広辞苑』ですと，第二版も第四版も同じでありまして，「女性が母としてもっている性質・また，母たるもの」というわけであります。これが現在私どもが母性という言葉を使ってる，だいたいこういうふうに集約されていいと思います。『広辞苑』はうまく説明していると思うのですけれども。母としてもっている性質，今でもまだ母性性なんていうことを言っていますが，いわゆる母性性というふうな言葉はこちらの前者ですね。母として持っている性質。でも現在は母性性より母性の方がよく使われている言葉だと思います。また母たる者ですが，医学領域では，母性というのは妊産婦さんそのもの，母親そのもののことを言います。ですから，母性看護学と言ったならば，妊産婦さんの看護，母親の看護のことを言います。ですから『広辞苑』の著者は実にうまく捉えたなと思います。心理学の方では，母性という言葉は『心理学事典』にはございませんですね。父性もございません。心理学者がいかにこの方面に従来関心がなかったかということが，こういうところからもわかります。

それでは父性の方はどうかというと，『辞苑』にはございません。父性という言葉は『広辞苑』になって，「男性が父として持つ性質。また，父たるもの」というふうになっております。今度は第四版になりましたらば，「父としてもつ性質」とあって，父たるものというのは消されております。これは第二版の方は母性のそのまんまですね。女性を男性に，母を父と置き換えたので，父性はこの「父としてもつ性質，または父たるもの」となったと私は思うのですけども。しかし日常的には父性はイコール父親というふうに私達は使いませんから，今度の新しい版では，「父としてもつ性質」という，これだけにもう集約されているというように思います。こういうわけで，父性という言葉，父親という言葉は，歴史的に，このように辞書一つ見てもわかる気がするわけでありまして，私はおもしろいなというふうに思いました。

先程少し母性のことに触れたのですが，母性で思い出すのは母性本能とか，母性愛などの言葉かと思います。父親の場合には父性本能というふうになるかと思いますが，父性本能という言葉は使われていなかったですね。母性本能は現在でもまだ，ときどき使われております。ただしこれは辞書にはございません。『心理学事典』にはもちろんのこと，『広辞苑』でも母性本能と言う言葉はございません。母性愛というのはございまして，父性愛はないのですけれども，母性愛はありまして，昭和10年の『辞苑』では，「その子に対する切実な母の愛情」となっているのであります。現在の『広辞苑』では，「母親が持つ，子に対する先天的・本能的な愛情」とあり，先天的本能的愛情などという古めかしい言葉が出てくるのです。

私は今からちょうど８年ぐらい前，ブラジルのサン・パウロで開かれました国際健康心理学セミナーに出席しました。前にサンパウロ大学に行ったことがあるものですから，サンパウロ大学の心理学の教授から，日本の現状について喋ってくれないかという依頼がありましたので，私一人出かけていきました。そこの，母子関係セミナー（ちょうど今日くらいのこんな規模でした）で，私の他には，いくつかの国の，小児科医の，女性の小児科医の方がシンポジストになったのですが，そこで私はこの母性本能否定論を打ったわけであります。母性というのは，母親というのは発達するんだというふうな話をしたわけであります。そうしたら私は猛烈な反対をくらいましてですね，日本にはそんな考えがあるのか（笑），というわけでたたかれました。何を考えているんだというわけで，そこで私はポルトガル語を喋れませんから，通訳をおきまして日本語で，まくしたてたのですけれども，大討論になりました。最後には大変おもしろいとみんなに言ってもらいましたけれども。世界はまだ本能論，母性本能論を信じているのかなというわけで，大変不思議な思いをしました。中には，お前はアメリカ文化に影響されすぎていると，猛烈に批判する者がいました。そうじゃない，俺は自分の独自の考え方でこれを主張しているのだと言いましたですね。その時に私が説明したことの一つは，母性愛についてでして，『広辞苑』に先天的本能的な愛情などとありますように，母性愛という概念それ自体が母性本能を肯定した上で，作り上げられている概念だと思います。やはりこれは，母性愛とはエモーションですから，違う視点でですね，これを捉えていく必要があるのではないかというこ

とで，話のプロセスは略しますけれども，当初私は母性感情という言葉を使いました。母の子どもに対する感情，母性愛に代わるものとして，母性感情というのは母親の児に対する，子どもに対する感情，これは従来だと一次元的に捉えて，愛と憎しみというものが直線の両極に存在すると。ある母親のある子どもに対する感情は，その一直線上のどこに位置するかというような見方で考えられてきたのですけれど，私はどうもそうではないのではないかと考えます。ここにございますように，二次元的な視点で捉えていったらどうだろうと。縦軸に接近とありますが，「接近感情」というのは，受容，子どもに対して受容的な，愛着的な感情をもっているということです。「回避感情」というのは，子どもを否定する，あるいは嫌悪するというふうな否定的な感情，これを回避感情と呼びまして，縦軸に接近感情，横軸に回避感情を置きます。例えばこのA子さんは，子ども，赤ちゃんに接近的な感情はこの程度もっている。だけど彼女はやっぱり赤ちゃんに対して回避的な感情もこういうふうな程度のものをもっている。B子さんは児に対する接近的な感情はこの程度，回避的な感情は高いと。こういう感情を測定するためには，最近はよく母の子どもに対する感情をサーモグラフィーなどで示していますけれども，あれではこういう視点で捉えることはできないのではないかというわけで，これが絶対的に感情測定のベストな方法とは思いませんが，私の考え方を具現化するためには，こういうふうな測定法が必要であると思って，現在でも対児感情評定尺度というものを使っております。

ご覧のように，形容詞がたくさん並んでおります。その形容詞が例えば左の方からいきますと，あかるい，よわよわしい，おもしろい，めんどうくさい，いじらしい，いらただしい，たのしい，というふうになっています。この一番上のあかるい，それから三番目のおもしろいとか，奇数番目の赤ちゃんに対する接近的な感情，愛着的な感情を示す形容詞というわけであります。２番，４番，６番というような，くさいだとか，こわいとか，うるさいとか，じれったいとか，いう形容詞，これは母親の児に対する否定的な，回避感情を示す形容詞となっています。そして接近感情の項目と，回避感情の項目とをそれぞれ３点，２点，１点，０点と採点しました。この採点方法，いいか悪いかちょっと問題ですけれども，臨床的にはこういうふうにした方が簡単なものですから，このように得点を出しています。そしてその二つの得点の拮抗度，相克度をむしろ見ている。どちらの感情が高い，低い，というだけではなくて，その二つの感情がどういうふうに拮抗しているのかを見ています。その母の子どもに対する感情を捉えていこうとしています。これは私の本当にささやかな臨床経験ですけれども，虐待する親というのも，やっぱりこういうところで捉えていった方がわかりやすいのではないかと思っております。

このようなことを，初め女性だけに進めていたのですけれども，たまたまある時，当然男性でも同じではないかと，男性にも通用するのではないかということになりました。これは柏木先生の先程のお話にもありましたけれども，同じではないかと。別にこれは，母性感情などと呼ばなくてもいいのではないかということですね。男にも同じように通用できるのではないかというわけで，先程お見せした評定尺度を「対児感情評定尺度」と呼ぶことにしました。対児感情というのは，あまりいい言葉ではないのですけれども，もっといい言葉があったら教えてください。児に対する感情ということで，対児感情というふうにつけたわけであります。

それで，ある時これも一つ思いつきまして，男女を対象にしまして，まず大学生に施行しました。赤ちゃん，小さい時から赤ちゃんとどのくらい接触したことがあるかということを調べてみました。乳児接触体験というわけです。小学校の時，中学校の時，高等学校の時というふうに分けて，「赤ちゃんの体に触れたことがありますか」，「おむつを替えたことがありますか」，「いないいないばぁをしたことがありますか」と。もうちょっと項目があるのですが，これは例であります。こうして，小学校時代はどうだった，中学校時代どうだったというように，乳児との接触体験を得点化してみたわけであります。これをやった後で，先程の「対児感情評定尺度」をやりまして，その接触の体験とそれから対児感情の，特にここでは，接触感情得点というものだけを取り上げてみたのです。わかりますでしょうか。この左の，多接触群というのは，例えば小学校の時に赤ちゃんとしばしば接触したことがあるという人達であります。こちらの少接触群というのは，あまり接触したことがないという人達であります。その接触項目の

得点を比較したしたところ，多接触群が27.9で少接触群が21.9で，それで検定の結果，これは１％のレベルの有意差というようなことがわかりました。これは小さい時から赤ちゃんと接するということが，大変重要だという知見を得た一つの結果であります。その時同時に男の方にも，同じことをやってみたわけであります。男性でも，やっぱりしばしば接触したという学生を多接触群，あまり接触したことがないという少接触群に分けました。けっこう男子大学生でも，赤ちゃんと接触したことがあるという人がいるわけですね，現実に。ご覧のように，まさに女性とだいたい同じような結果になっているわけであります。こういうことから私は赤ちゃんに対する感情，対児感情というのは，性ということによって規定されるのではなくて，幼少時からの赤ちゃんとの接触体験が大きく影響してるのだなと考えたわけであります。

私自身も実は赤ちゃんが大好きでありまして，赤ちゃんが大好きだからこんな研究を始めたと言っても，過言ではないのであります。今ちょうど孫が家に来ておりまして，帰ると孫と遊ぶのが楽しみで，今日も帰ったら孫をおんぶしてやろうと思っています。息子，娘ともに赤ん坊の時からずっと，私はおむつを替えたり，お風呂に入れたりするのが大好きだったのでありまして，娘はかなり大きくなるまで私と一緒にお風呂に入っておりました。子どもの側からすると，父だからどう，母だからどうというふうなことではなかったようです。私もこれは父親としてやったらいいとか，悪いとかではなく接してきたものですから，だからますます赤ちゃん，子どもが好きという自分の体験からしても，大変納得できる研究結果だと思ったわけであります。

それからもう時間でございますけれども，もう一つだけお話しするのをお許しください。「対児感情評定尺度」に関連しているのですが，私はある時，幼児を育てているご夫婦を対象にして，研究をやりました。「対児感情評定尺度」を夫婦に施行したのですけれども，ここに挙げました対夫，これもよい言葉ではないのですけれども，奥さんにですね，夫に対してどんな感情をもっているかを聞きました。接近項目と回避項目を置きまして，これは例なのですけれども，うちの亭主は頼もしい，やさしい，誠実な，素敵な，勇ましい，などを接近項目にして，回避項目の方は，いい加減な，やかましい，図々しいなどという形容詞を置いて，対児感情評定尺度と同じように評定してもらったわけであります。そして，ここで対児感情の得点と，対夫感情の得点との関係を分析してみました。ここでは夫に対する感情の接近項目得点が高いH群と，それから接近得点が低いL群との間で，赤ちゃんに対する感情，対児感情，その接近得点の平均がどうなってるかということを見ました。それを見ましたところ，夫に対する接近感情が高いグループの方が，低いグループよりも対児接近得点が高いと，１％水準で有意な差があるということを見たわけであります。これは，恵泉女学園大学の大日向雅美先生が，『母性の研究』を書いておられますけれども，夫に対する態度というのが，結局それは，自分の子どもに対する母親の態度に大きな影響を及ぼしてるんだというような研究をしていらっしゃいますけれども，私の場合は対児感情という点で，夫に対する感情が赤ちゃん，子どもに対する感情と，非常に関連性が高いということを見て，私自身なりに，これはむべなるかなというわけで，ある点では大変心強く思ったものであります。

またここで父親の発達，母性もそうですけども，母性本能論を私は否定すると言いましたけれども，これを否定するということは，私はやっぱり父親も発達するものだということを，結局言いたいということになってくるわけであります。お互いに，補い合うというか，助け合うと言いますか，そういうふうなことで，父性，あるいは母性というものが発達するのではないか。確かに，父性・母性は少し違うと思います。現在では，ファザーリング，マザーリングではなくて，ペアレンティングというように考えられてきている時代ではありますが。父性，母性という言葉，これを使うと古いよと言われそうな気もするのですけれども，我が国ではしばらくの間，父性，母性という言葉を使っていきたいと思います。私は男の父性，女の母性ではなくて，やはり男の父性，同時に男も母性，私が子どもをお風呂に入れたり，おんぶしたりという，それを好きでやってきましたけれども，それは私の中の母性だと思っています。女房もですね，父性はあるんじゃないかと。時々女房の中に父性を垣間みて，ニヤッとすることもあるのですが，やっぱりそういうふうに考えた方が，私は人間性の発達という点で，自然ではないかと思っ

ております。

あえて最後に全く個人的な感想で言わしていただくならば，父親と母親というのは，社交ダンスみたいなものだ。どちらがどちらへではなくて，両者が相手と共感しながら踊って初めて，ダンスは美しくなるのですし，そういうふうなことで相手の立場を尊重しながら，お互いに協力し合っていくというのが，これからの人間社会としては望ましいのではないかと思っているわけであります。

司会：どうもありがとうございました。花沢先生には今までのご研究の一端を，お示しいただいたわけでございますが，今のように母性・父性ということではなくて，むしろ一緒にするというような考え方もあるけれども，しばらくはやはり母性・父性という捉え方でいってみたらどうか，というようなご意見を主として発表されたかと思うのでございます。また，色々ご質問等，後で承りたいと思いますが，最後に飯長先生にお願いいたします。飯長先生には臨床心理学の立場から本日の話題提供をしていただくわけでございますが，先刻ご逝去されました，佐治先生の元でご研究された先生でございますので，なんらかの形で色々な示唆をいただけるのではないかと思うのでございます。

先生どうぞよろしくお願いいたします。

飯長：こんにちは，はじめまして。というのは応用心理学会の会員ではないものですから。大方の方とは，はじめましてという感じかなと思います。私はカウンセリングが専門でして，必ずしも教育相談，母親相談が専門ということではありませんが，それも含めて，日常的には教育相談，子どもの相談に関して母親とお会いすることが一番多いかと思います。

先程来，母性・父性というお話ありましたが，10年程前に必要があって高校の家庭科の教科書を調べたことがあります。６～７種類調べたと思います。家庭一般の教科書の保育の箇所を調べました。10年程前ですと，ご存知の方もいらっしゃるかも知れませんが，「母性」という言葉が出てくるんですね。一つの章の中で「母性」がある。その中で「母性と父性」と書いてあるのが１冊だけあった。一ツ橋出版という会社の当時の教科書がそうでした。その他の５～６冊は全部母性はあっても，父性は取り上げられていませんでした。ああこれはずいぶん偏っているなと，10年前にしろ，少し考えが狭すぎはしないかなと思っていました。その後，家庭科の教科書が全部変わったと思います。その変わったものを見ましたら，全部「母性と父性」となっている。全部変わっているというのも気持ち悪い話ですが。これは結局そうしなさいというお声がどこかからかかるわけで，そういう声がかかることの構造もどうかなとは思いますが，少なくとも建て前の上では，父性も母性も同じような重みで教科書レベルでは載るようになってきた時代の変化を感じるわけです。

今日は母親相談ということにしていただきましたが，母親相談という相談は日常的でありませんで，先程申しましたように教育相談が多いわけです。実際には私はお母さんとお会いすることが多い。大学院で仕事をしているということもありまして，子どもの担当，あるいは遊戯療法とかそういった担当が大学院生側にあることが多いものですから，必然的にそういうふうになる。父親の特徴と発達というふうにさせていただきましたが，実は羊頭狗肉でありまして，父親の特徴というのはある程度言えると思うのですね。ところが発達について言えるかというと，正直なところ最後に行くと発達して欲しいという言い方しか，たぶん出来ないのではないかなと思っています。

もう一度最初に戻りますと，お母さんとお会いすることが多いわけですが，子どもの相談でいらっしゃるお母さんは，二重の意味で苦しんでいらっしゃることが多いですね。一つは，子どもの問題というのは，不登校にしろ，あるいは，いじめの問題にしろ，発達の遅れにしろ，発達や成長上の問題というのはどうしても，長期に渡るわけです。それでここをこう押せばこういうふうにアウトプットが出るという形に，なかなかいかないケースが多い。もちろんある特定の分野の障害や問題については，行動変容といわれるような方法等で援助することもあるとは思いますけれども，私がお会いする人達はそういう問題は比較的少のうございまして，どちらかというともう少し長期に渡って色々なことを考えていかなければいけない。何かいい方法があって，その方法を借り物でも何でもいいからやってみれば，いいアウトプットが得られるというふうになりませんので，非常に見えにくいわけです。具体策が非常に見えにくい。それから非常に長期化する。一般的な意味でのカウンセリングは，必ずしも長期化するわけでは

ありません。実際のカウンセリングは数回で終わるものが多いのです。今日正確なデータを持っていませんが，平均３，４回とかそんな回数です。学生相談などですと，１回こっきりで終わるのが半分以上なのです。ちょっと脇道にそれますけれども，１回こっきりで終わったケースの多くは，それなりの効果を上げて，もう必要なくなったから終わった，というケースが多という話もあります。それは別として，一般的なカウンセリングは必ずしも長期化するとは限らない。現実に私の場合もご本人自身の問題でお会いする場合に，数回で終わる場合もありますし，数カ月，10回程度で終わることもあります。もちろん何年かお会いする場合もありますけども。ところが子どもの発達上の問題ということとなると，やはり否応なしに何年もという感じになります。長い方はやはり６年７年，毎週のようにお会いすることはなくなっても，時々困るとお手紙をいただいたり，あるいはお電話をいただいて何年かに一遍，例えば遅れのある子どもが学校を変わる，中学を終わるときに高校をどうしたらいいか，というようなことでおいでになるとか，そのような形でおつきあいが続くことが多いです。つまり，子どもの問題で相談にいらっしゃるお母さんというのは，非常に具体策が見えにくいということと，長期化するということ，そういう子どもの問題自身でまず一番目の悩みがあります。

それから，もう一つは，母親の孤立感です。何か知識が欲しいということであれば，知り合いに聞くとか，近所の人に聞いてみるとか，親戚に聞くなどできるでしょうが，子どもの問題，それも深刻であればあるほど，周りの人に相談しにくい。親や友人，あるいは近隣の人々に相談しにくいわけです。そうするといきおい夫が頼りになる，なって欲しいわけです。ところが実際に治療や相談の場に出てきて，母親と一緒に取り組んでいこうという姿勢をもっている夫は，ほとんどいません。ゼロとは申しませんが，非常に例外的ですね。一つにはその相談機関の置かれている場所にもよると思います。例えば世田谷区ですと，３ヶ所くらいに区立の相談機関があります。教育相談の機関がありますけれども，そういうところですと比較的近いので，最初はお父さんとお母さんとで相談に行くことがあります。ただ，だいたい最初だけです。まして大学までは，非常に希なケースしかおいでになりません。そういうことで，どうしても母親がひとりで背負い込まなければいけないという，二番目の苦しみがあります。

母親が夫に相談をもちかけた時に，夫がどのように対応するかといいますと，色々お母さんのお話をうかがうと，およそ３種類に分かれるかと思います。一つは私はこうあって欲しいと思うのですが，相談に乗って母親自身の考えや悩みも聞き，自分なりの考えも出し，そしてそこでお互いに意見が違っていいわけですね。違っていいのですが，そこでもみあってどうしようかってことでやっていく。あるいは自分は仕事でそうそう相談機関に，一緒に行くことはできないけれど，「どうだった」と話を聞いて，またそれをシェアーして，じゃぁどうしようかということでやっていく。そういうふうになって欲しいと思うのですけれども，なかなかありません。

二番目にはどういうのかというと，一応相談に乗る。こういう人が多いと思いますが，いわゆるかっこつき民主的になっていますので，夫たるものやはり妻の悩みにつきあわなければいけない，というふうには皆さん思っているわけですね。ですからある程度は相談に乗るのですけれども，結局のところ，母親の対応を責めるようになるのですね。「お前がやっぱりうるさすぎる」とか，「お前が甘すぎる」とか，「お前が同じことばっかり言い過ぎる」とか。要するに妻のやり方が悪い，妻が不十分だという形での対応になりがちなケースが多いですね。

それからもう一つ，これはいい面悪い面両方あるかもしれませんが，子どものことはお前に任せているということで無関心。非常におざなりには話を聞くかもしれない，母親を責めることもないけれども，それ以上関心ももたないということで，そもそも相談に乗らないわけです。

先程育児不安というお話もありましたけれども，何年か前に私のところで修士論文を書いていった人で竹之内さんという人がいます。雑誌『発達』で小さい特集をやった時に，母親のソーシャルサポートについて数ページ載っています。興味のおありになる方はご覧になっていただきたいと思うのですが，その竹之内さんの調査ですと，やっぱり母親の育児不安が高いか低いかというのには，夫が情緒的にサポートしているかどうかっていうことが，密接に関係があるとクリアに出ていたのを思い出します。と

ころがなかなかサポートしてくれないのです。特に情緒的にサポートしてくれないですね。お母さんを通して見えてくるお父さん像ということになるわけですけれど，子どもに色々な問題が顕在化した場合のお父さん像。これはお父さんが原因でそうなるというお話ではございません。これを間違いないようにしていただきたいのですけれども，原因結果の話ではなくて，私のところに相談にくるケースのお父さんの特徴ということであります。お父さんの特徴として，４種類ぐらいを考えてみました。

一つは，直面化を避ける傾向が強いと思います。これは一つには，お母さんはどうしても伝統的に子どもと近い距離にいますから，子どもの問題にぶつからざるを得ない。そうすると，良いか悪いかは別として事実としてお母さんは，自分に問題があるのではないかということで，それは大変苦しいことですけれども，見直しの作業をせざるを得なくなってくることがあるわけです。自分のやり方，あるいは自分の育ち，自分の夫婦関係，そういったものを見直さざるを得なくなってくる。これは子どものパワーで，そうなるとも言えるのかもしれません。ところがお父さんは，そもそもそういう問題を避けることが許される状況にありますので，自分の問題として入っていかない。育児に関して自分の問題として引き受けないということだけではなくて，そういうタイプのお父さんは他の問題に関しても直面化を避けることが多いような気がします。ある不登校の子どものお父さんは三日酔いしちゃうんですね。ぱっと休んじゃう，動けなくなってぱっと休んでしまう。３日間休んでしまうぐらいのお酒になってしまうのですね。それを繰り返す方がいました。それはずいぶん昔の話ですけれども，割合最近の方でもやはりお酒に走って，いわゆる一升瓶ではもう間に合わない。高いですから。紙パックのお酒です。一升のお酒が２日ないし３日でなくなる。と同時にもちろんビールも飲むわけですから，だいたいその倍のアルコールが入りますね。これはもう完全に10年経つと肝硬変というレベルだと思うのです。そういうお父さんはアルコール嗜癖に加えて，職場で問題があると，職場の問題から避けようとして登社拒否の傾向があるとか，あるいは家庭の問題からも避ける。だから色んな問題に関して直面化を避けるというタイプのお父さんが，私のイメージにあります。

二番目の特徴としてやはり他罰的であることです。自分で引き受けないというのはPFスタディ流にいうと二つのタイプがあって，他罰的になるか無罰的になるかです。つまり子育てについては，先程お母さんを責めたように他罰的になるわけです。お母さんを責めるという形になります。さもなければ関心を持たない。

それから三番目に，一面的で，固定的な価値観，対応，あるいは極端なものの言い方をなさる方が多いような気がします。その考え方が非常に固く，フレキシブルでないものですから，子どもに対しても非常に一面的に，妻に「お前が悪い」というような，その言い方もだいたいパターン化してしまうことが多いのですけども，子どもに対しても非常に一面的，一方的，固定的な言い方です。どういう言い方かと申しますと「そんなことも出来ないのか」「そんなの出来て当たり前だ」「そんなこと出来ないのはお前が努力しないからだ」という一種の能力感。そういう言葉がいろんなケースから聞こえてきます。あるいは「ごちゃごちゃ言わないで早くしろ」という言い方とか，あるいは，相談に来るお子さんは，色々な細かい癖のようなものを持っている子がいます。ご飯食べた後すぐゴロゴロしちゃったり，食事の時のお箸の持ち方が不器用だったり，行動の仕方がエレガントでないというか，ぎこちなかったりします。そのような色々な時に，極端な言い方で責めるのです。怒鳴るか，怒鳴らないかはタイプによって違うのですが，「そんなことする奴は人間じゃない」というような言い方，これが典型です。これは何例かの事例をイメージして申しています。ある行動の仕方から，その人間の基本的な価値を根こそぎそいでしまうような，言い方をすることがあります。能力感ということで言えば，先程のやらないから出来ないのだというような，あるいは逆に言うと人間は努力をすれば何でも出来るはずだ，という能力感ですね。要するに会社では，お父さんは世の中に色んな人間がいるというふうに，思わざるを得ないと思うのです。それぞれの立場を気遣いながら，会社で暮らしておられると思うのです。そうでないと，若い時はいいかもしれませんが，中間管理職から上では，人をうまく使えないでしょうし，うまく行かない。しかし，どうも家庭では，会社ではもっているかもしれない，フレキシビリティがうまく発揮できないお

父さんが目に付きます。

それから四番目に，これも先程ちょっと触れましたが，情緒面への関心の低さが言えると思います。お母さんは，例えば子どものことで相談に乗ってもらいたい。もちろんサポートするのに，子どもと一緒にお父さんが遊びに行ってあげる，そうするとお母さんが楽になりますね。あるいは家事を手伝う。そうすればお母さんが少し楽になる。皆さんがよくご存知の，道具的なレベルでのサポート，それは役には立つのですけども，お母さんのお話を聞くと，お母さん方が訴えるのは，やっぱり私の気持ちをわかってくれないという，気持ちのレベルです。そしてそれは，全部賛成しなくともよいものです。同じに思ってくれなくても，少しゆっくり聞いて，それはそれなりの考え方があってもいい。でも俺はこう思うと言う。そういうコミュニケーションがうまくできない。そういうことでお母さんが孤立感を強めてしまう。つまり，お父さんが，道具的なサポートというところまである程度考えても，情緒的な意味での関心ということではどうも，苦手な人が多いような感じがします。

先程お父さんの発達ということに関して，なかなかよう言えないと申しましたけれども，変化していかれるお父さんもいらっしゃいます。その前に，一言申し上げなければいけないのは，やはりお母さんが最初に変わります。お母さんであれお父さんであれ，我々はけっこう固い価値観や能力感の中で育ってきて，ある価値観をもちますね。他人事ではなくて私自身もそうです。ところがその価値観ではどうにもならない事態に，特に子どもの問題などではぶつかるわけです。育児に関心を持てないお父さん，あんまり手伝っていないお父さんは，子どもに対して分身意識があります。逆に言えば，子どもとつきあっていればつきあっているほど，異物として，自分と馴染まないものとして子どもを感じざるを得ない，そういう事態にぶつからざるを得ないわけです。そうするとやっぱり人間だって，色々あるということを感じざるを得ないわけです。あるいは，もっと卑近な話で言えば，２人の子ども３人の子どもを育てると，同じ組み合わせの夫婦から生まれた子どもでも，全然気質が違いますね。気質の研究までは私はやっていません。これは他の専門家がここにもたくさんいらっしゃるかも知れませんけれど，そういう気質という言葉をお母さんは使わないにしろ，やっぱり子どもだって色々ある。絵に描いたような人間なんて，そんなにいるものではないと，お母さんが思うようになるものですね。それは否定なしに直面化せざるを得ないから，お母さんの考え方が変わっていくのです。

これは障害児の研究に近い方々はよくご存知だと思いますけれど，特に障害児を抱えた場合に，親御さんの人間観が本当に素晴らしく膨らんでいく例がたくさんあります。子どもの相談にいらっしゃるお母さんが，多かれ少なかれそういう価値観を，多面的にというか，総合的にというか，広げていきます。あるお母さんがこのあいだいらっしゃいました。お子さんに軽い障害があって，定時制高校を今度卒業するぐらいの感じだと思ってください。６年，７年程前まで，６年程おつきあいしたお母さんです。６年程おつきあいして，それで離れて，年賀状だけのやりとりだった方が，半年程前に電話をかけてくださって，久しぶりに行きたいということでいらっしゃいました。定時制が終わりそうなので，家業を何とか手伝っていけそうですと，報告に来ましたという話だったのです。そのお母さんがおっしゃった言葉に，私は本当にびっくりしました。やっぱり，本当にそういう問題に直面した人でないと言えない言葉だと思ったのですが，「人間は，先生ね，みんな障害者なんだよね」とおっしゃったのです。つまりその人間というのは絵に描いたような五体満足な，欠けるところのない人間がいるわけではなくて，多かれ少なかれ何か問題があり，ハンディキャップがあり，得手不得手があるというようなことで，程度の違いはあれ，人間はみんなそうなのではないかというわけです。そのお母さんは私に気安いものですから，私に教え諭すような感じでした。私は，ああそうですね，よくわかりましたと言っていました。要するに，お母さんは否応なしに変わっていくのですね。もちろん色々なお父さんがいらっしゃいますから，本当に問題を引き受けて辛い思いをなすって，どんどん変わっていくお父さんもいらっしゃると思いますが，私がお会いしているお母さんから見えるお父さん像と言いますと，お母さんを通じてお父さんが変わってくる。つまりお母さんが段々強くなってくるわけですね。一度言ってそれが言い返されたら黙ってしまうのが，二度三度言うようになるとか。ある

いは，お母さん自身のアサーティブネスというか，そういったものが出てくる。お父さんがそれにつきあわざるを得なくなってくるわけですね。もう少し私の相談に乗ってくれてもいいんじゃないのということが，ちゃんと言えるようになってくるわけです。お母さんのいわゆるソーシャルスキルというのでしょうかね。応用心理学会をちょっと気にして言っていますが，ソーシャルスキルというのがやっぱり上がってきて，上手にお父さんとやれるようになってくるのだと思います。

あるいは，お母さんの悩みが本当に深くなってしまって，情緒的に不安定になって，例えば死にたいとかいうような話になってくる。それはお父さんにとって容易なことではない。ということで，お父さんが否応なしに変わらざるを得ないということはあると思います。しかし多くはなかなかお父さんの姿勢は固くて変化が期待できません。ですから私は最初の頃は実は，お父さんにも来ていただけませんかということをやったこともあります。大抵うまくいかないです。家族療法の場合には最初からそれを条件とし，それなりのプログラムを組み，そしてチームを組んでやっていくわけで，それはまた別の話です。けれど，私は基本的に個人カウンセリングを行いますので，そういう場合こちらからお願いして，お父さんに来ていただいてもなかなかうまくいきません。大抵お父さんが上っ面のお話だけをして，立派なお話で終わってしまいます。だいたいは建前論とか，なんか繕う言葉をおっしゃって，終わってしまいますね。例えば，家の中の色々な問題，もう時間がないので詳しく申しませんけれど，色々な問題があるのに「ウチには大した問題はありません」，「たまたま今ちょっと子どもが休んでますけども，でもそれも大した問題ではありません」とおっしゃっいます。実は子どもが学校を休むから大変だというのではなくて，他にいっぱい問題があるのです。お父さんは，私がそういうことをもう既に知っていることを，ご存知なのかどうかわかりませんけれども，大した問題はありませんと言って帰ったお父さんもいます。あるいは「子どもには，言ってすぐ変わるもんではありませんよね，あっはっは」とかなんとか言っていわゆるソーシャルなコミュニケーションというか，社会的というより社交的なコミュニケーションで終わってしまいます。

それで実際にはそういうお母さんとお会いしていて，お父さんに期待したい発達というか，成長というか，変化の方向が，私なりにあります。それを三つにまとめて申し上げたいと思います。

一つはやはり多様な価値観を持つようになって欲しいなと思います。能力観，人間観，価値観。少なくとも多様な価値観への許容性はもって欲しいと思います。自分自身の価値観そのものが変わるのは，大変なことだと思いますが，もう一つ手前でもお願いできないかなと思っています。色々価値観がある。その価値観，「自分はなかなかよう変わらんけど，そういう人がいてもいいんじゃないの」くらいまでは行ってもらえないかなと思っています。それから二番目に，繰り返しになりますが，母親を情緒面でサポートして欲しい。道具的というよりもどちらかというと，情緒面でサポートして欲しい。それからもう一つ，ご自分自身の生き甲斐の見直し，これは今日の最初からの私のテーマとは必ずしも結びつきませんけれども，会社人間，仕事人間でいられるのは，つまり現役でいられるのは，55～6歳までですね。私今51ですけれど，私の友達みんな子会社に移りました。大企業の取締役にならなければ，子会社の取締役くらいにだいたい行ってますね。もう先が見えてるわけです。昔のように55歳で定年で，60で死ぬということはもうないわけです。既に会社の本体からはずれ，さらに55でもうひとはずれし，60まで定年がのびたとして，平均的に言っても十数年さらに生きますね。長い人はまだ20年ぐらい生きるわけです。その人達がどこでどう，生きていくかという問題です。私もそろそろ考え始めようと思っておりますけれども。会社なら会社，役所なら役所，学校なら学校という，既存の組織の中での組織人として，どう生きたらいいかということで，50過ぎまでやってくると思います。それがそのライフスペースと言いますか，今まで生きてきた社会の比重が小さくなると同時に，家庭とか地域というところで自分がどう生きるかというその生き方を模索しなくてはならない。それと同時に，地域では自分が主体性を持って組織なり人脈なりを，作っていかなければならないわけです。今までそういう意味では受動的で良かったかもしれないけれど，もしかしたらこれからの高年者になっていくお父さん達は，自分でむしろ主体的に生きること，つまり生き方を創造していくことをやっ

ていかないと，えらいことになるのではないか。女の人はどんどん元気になり，男は昔からいわれる濡れ落ち葉になっていくしかないのかという，岐路にあるかなと思っています。話がちょっと飛びすぎたのかも知れませんが，ここまでにさせていただきます。

司会：ありがとうございました。飯長先生からは母親相談を通して見た父親の将来像とでも申しますか，そういうふうなことについてお話をしていただいたかと思います。それで３先生の話題提供はひとまずこれで終わったことになりますが，後，時間的に１時間ございます。もしよければ，10分ほど休憩をいたしまして，３時45分から，質疑応答等に移らせていただきたいと思います。

⁂⁂⁂ 休　憩 ⁂⁂⁂

司会：そこでまず最初に，先程，３先生に色々お話をうかがいましたけれども，時間等の都合で何かどうしても補足したいということがございましたら，簡単に補足をお願いしたいと思います。

柏木先生，何か。

柏木：私の論そのものは補足はやめますけれども，今，お二方の先生のお話を聞いていて，それぞれ思うことがございました。

一つは，これは後のディスカッションのテーマにもなるのかもしれませんが，花沢先生がおっしゃった，その「違う」ということですね。それは私のデータでも確かに違う。だけれどもそれが何の要因かということを詰めていくことが，結局対児感情ですか，あるいは子どもに対する感情というものがどういうふうに，どういう要因で育ってくるかという問題なのかなというふうに思いました。

それから，もう一つは飯長先生のおっしゃった父親の特徴ということは，そういうところにいらっしゃるお父さまの特徴でもあるのかも知れない。けれども，一体なぜそうなるか，ということで，子どもを育てるとか，ウチのことをするというのは大変かも知れません。会社だって大変といえば大変，職業だって大変なのですけれども，もっといわく言い難いごちゃごちゃ，べちゃべちゃ，どろどろした，そして努力とか目標とか，能率とかということが絶対成り立たないようなことをするというなかで，人間がずいぶん鍛えられる面がある。そういう点では，お父さんたちが職業人だけでいるということの欠陥ではないかというふうに思いました。そう考えると，もちろん女の人や女性の，お母さんの側の問題もあるんだけれども，長年続いてきた性別しつけとか，ジェンダーのつけがまわっているのではないかという思いをいたしました。

司会：はい，どうも。では花沢先生。

花沢：今の柏木先生の，ご質問というわけではないかも知れないけれども，ご指摘にお答えすることになるのでしょうか。私はやっぱり男と女，父親と母親というところの差が出てくるのは，妊娠お産というあたりからではないかと思います。何といっても，やっぱり女性は妊娠40週と長い時間赤ちゃんと，まだ見えない赤ちゃんとつきあう。そして，その40週経つと，お産ということになりますね。こんなことを言うと助産婦さんあたりから「先生は男だからそんなこと言うんだ」と言われるのですが，お産は本来そんなに，はいつくばるほどの苦痛ではないのではないかと（笑）私は思っています。でも，まあ大変な苦労をしてお産をされるわけであります。男の方は，そういうふうなことはないのでありまして，落語に，男ものんびりさせちゃあいけないから，奥さんが陣痛になったら亭主にも陣痛を体験させたらどうだ，というわけで，神様がそういうふうに（笑）したらば「てめえの女房が陣痛になっても，亭主は一つも苦しまなかったけれど，隣の奥さんが陣痛になったら苦しみ出した」という落語がありますけれども（笑），それで神様はそれを止めてしまったという噺もあるけれども。一緒に苦労することが，これからは大切かと思ってはいます。今までは，女性だけが苦しい体験をしてきました。40週というのは結構長い期間ですね。つわりもあるし，妊娠に伴う不安，お産に伴う不安，そういうものを色々と体験している。男にはそれはないわけであります。

かつてはなかったのですが，最近は男も一緒に体験してもらおうではないかというので，夫立会分娩ということで，奥さんの手を握りながらというふうな，あるいは母子同室制といいまして，お母さんと赤ちゃんが同じ部屋で産後を過ごす，お父さんは結構そういう時に部屋で奥さんと関わる機会が出てまいります。最も典型的なのが家庭内分娩ですが，家庭内分娩はなかなか今難しいのです。病院の中に，ご存知のように，LDRという部屋が最近，作られて

まいりました。Labor, Delivery and Recoveryですね。陣痛が始まったら入院し，そのLDRの部屋に入る。そこには産婦さんのベッドがあって，それは決して産科施設にあるところの，ああいう女性だったらご存知のような，あの形のものじゃなくて，普通のベッドのようなもの，それが色々角度が変わる。それから亭主用，家族用のベッドもある。それから浴室もある。簡単な食事が作れるところもある。というわけで，そのひと部屋で家族中が一緒に生活できる。陣痛から産褥まで一緒に生活できるという，そこで生活すると亭主も一緒になって，奥さんと苦労を共にする。そういうことで，子どもができる苦労というものを男は知っていく。

それから育児でも，昔の亭主はうるさいからというので別室に寝て大いびきをかいている。最近は女房を手伝おうというので，若い男性は一緒に夜中には授乳を手伝うとかいうようなことで，苦労していくことで初めて，俺は父親になるんだ，なったんだというようになってくるのではないかと思います。

ですから，最近の若い男は情けないというお考えの男性もいるかも知れませんけれども，どうもやっぱり，男は女性に育てられる（笑）という点がある。だいたい昔から男は大黒柱うんぬんと言われてきましたが，これは嘘であって，それより「かかあは家の重石」と昔から言われてきたことの方が本当だと思います。家の重石がなかったら家はもうどうにもならない。かかあはもう大変な存在で，だからその亭主の方はその周りをうろうろしている。そのかかあに「おまえさん，こうして」というように，色々と教育されて初めて，男は父親になり，父親が発達してくるということが今まであったし，これからもやっぱりそういうようなことではないかと思います。私は，女性に妻に母に育てられるのではなくて，さっき言ったように，一緒に苦労していくというところで，初めて人間としての父親が発達していくのではないかと思うわけであります。

司会：ありがとうございました。飯長先生，何か。

飯長：とくにありません。

それでは，ただ今からフロアの先生方から質疑等をいただきたいと思います。ご質問いただく場合に恐れ入りますが，所属とお名前をお願いしたいと思います。それから携帯のマイクがございませんので，マイクをお持ちしますから，ご発言の方は少し前へ出てきていただいて，お願いしたいと思います。

質問者1：立正大学文学部哲学科3年心理学専攻で松原教授のゼミ生の国府田と申します。先程，花沢先生がおっしゃったのですけれど，確か男と女の違いというのは，子どもを産む産まないかだというような中国の学者もいますが，今，子どもを産まないという選択もありますね。そいう時はジェンダーの役割とか，そういったものはどうなるのでしょうか。またはシングルマザーというのも，今流行というわけでもありませんが，あります。そいう場合の女性性・男性性についての変化というのは一体どのようになるのでしょうか。

花沢：先程，私は母性・父性ということで申し上げましたけれども，母性とか父性とかいうのは，結婚しているとか子どもがいるとかということと無関係ではありませんけれども，それと直線的に結び付けて考えなくてはいけない，ということはないと思います。ですから，私は母性というのは母親らしい関わり，というようなことでも，捉えていい概念だと思っています。あなたも母性というものをもっている，またあなたの中にもまだ父親になっていないかも知れないけれども父性というものがある。父親・母親という呼び名になってくると，やはりこれは子どもとの関わりということで捉えていく言葉だと思います。ですから，シングルマザーというのはありうるわけですよね，これは亭主との関わりではなくて子どもとの関わりというところで言われる言葉だと思いますから。だから，それがシングルであろうとダブルであろうとなんであろうとも，子どもがいれば，また実際に子どもを産んだことがなくてもですね，その子どもがいれば，その人は母親だということになると思います。未婚だ既婚だ，夫がいるいない，父親がいるいない，ではなくて，父親は父親，母親は母親，それは子どもを育てている，子どもとの関わりで言われている言葉だと私は思っています。

飯長：ちょっと暴論かも知れませんし，まとまっていないのですけれど，私がいつも思っていることを申し上げたいと思います。今の母性・父性という時に，私は母性・父性という考え方を止めた方がいいかなぐらいに思っています。例えば子どもを育てる機能，あるいは情緒的に，可愛がって育てていく機能とか，あるいは子どものいる家族というものを経済的に支えていく機能とか，そういう色々な機能と

して考える方がいいのではないかなと思っていて，ですから例えば母性とか父性とかというふうに暫定的に使っているものでも，それは機能として考えるべきであって，子どもなり人間なりが，家庭なり社会の中で，育っていく，人間が育っていく時にはどういうものが必要かという時に，色々な機能があって，その機能をどういう人がどういうバランスで，担っていくかというふうに，これからは考えていく方がよいのではないかと思っています。ちょっと見には，いわゆる母性といわれるものはその女性が多く担っており，父性といわれる機能はその男性が一般的にたくさん担っているように見えるかもしれないけれども，個別にはものすごくバリエーションがあると思います。むしろ，そのバリエーションが一体どれくらいあるものかという種類の研究をちゃんとやった方がいいのではないか。母性・父性といわれるものが，いわゆる男性，女性で担い方が逆転しているのは，やっぱり案配悪いよというデータが出てくると，また話は全然違ってくるかも知れない。そういう種類の研究はそんなに難しくないと思うのですが，どうでしょうか。

花沢：それでは隣のよしみで私がお答えします。飯長先生がおっしゃったこと私よくわかります。わかるから，さっきも申し上げたように，男の父性だ，男の母性だとか，女の父性とかいうことも言っているのであって，私からすると別の言葉というか，今も飯長先生は，それを取っぱらえというように言われましたが，私もそれを取りたい気持ちもあります。ですけど，これまた，先程もご意見がありましたが，ではなぜ違わなくてはいけないのか，なかなかお答えできない難しい問題だと思います。今のところ，私はその家庭内の機能は，こういうふうなものがあるということをただ平面的でなくて，一人一人の子どもとの関わりで，それを総括していく必要があるのかも知れない，体系化していく必要があるのかも知れない，と考えます。その時の一つのキーみたいなものとして，まだ母性・父性という言葉が必要ではないかと。そのことについて私はまだ何も研究していません。これらの言葉を取っぱらっていいというほどのことをまだ，やっていません。いずれ，いいとなったら，私取っぱらいますけれども，まだそういう段階ではないので，最初から取っぱらってしまっては，何も出てこないような気がしているものですから，今のところ，まだ父性・母性という言葉を使っています。ただし，もう一度念のために言いますけれど，私は男の父性，女の母性という，そういう従来の紋切り型的な考え方ではないということで，個人の中で両者がどういうバランスにあるかということで見ていった方が，父親としての発達，母親としての発達ということを考えていく場合にもいいのではないかなと考えています。

柏木：1932年，今から65年ぐらい前のことですが，幻に有名なデートリッヒという大変有名な名女優が，パリのセーヌ川を，ジャケットとズボンで歩いていたら，警官に「良くない」といって叱られて，「そこを去れ」と言われたという事件があったそうであります。ところが去年，コムデギャルソンという世界的なデザイナーが，男性のファッションに，スカートに近いようなものを発表して大変アピールしたということを読んだことがあります。これはどういうことかというと，かつては，男と女ということがはっきりと二分されていた。あるいは上と下という二分法で世の中が何でも成り立っていた。それに対して，男の人がずっとスカートを履くようになるとは思いませんけれども，しかし反対に，今，ここにいらっしゃる女の方でズボンを履いている人が少なからずいらっしゃるというふうに，境界は段々に狭まってきた。その狭まってきたということにはある必然性が在るわけです。

先程，飯長先生が，両方をお父さんもお母さんも担っていくのが良いのではないかとおっしゃったのですけれど，その良いのではないかということの根拠は単なる個人的な好みということではない，と思うんですね。私が一番最初に，モデルで示したように，世の中の変化は，どうしても人間の在り方を変えざるを得なくしている。例えば機械化は，みんなが嫌だからやめとうと言っているわけではなくてどんどん押し進めた，と。それから子どもの数も適当にコントロールし，ちゃんとそれだけ育つようにしてしまった。そうなると，どうしても母親役割，父親役割，あるいは家事の意味というものが変わらざるを得ない。そうなると人間がどういう力をもっている必要があるのか，ということは大きく変わり，そして，こういう人でなければできない，こういう人でなければ駄目だということの領域は段々に薄れてきた，そういう状況があるのですね。

そういう中で，また一方で，花沢先生がお示しになったように，また私のデータも示すように，子どもに対する感情とか，おそらく，スキルも例えば育児のスキルも初めから備わっている，下等動物は皆生まれながらに備わっていますけれども，高等動物は生まれながらに備わっているというわけではなくて，学んでいく。そうだとすれば，そういう必然性，変わっていく必然性があり，そして，その可能性があるという根拠の意味でも，私はもっと変わって担っていけば良いというよりも，担っていく方向に変わるだろうと予想しています。

それが今ちょうど過渡期で，うまくいっていないものだから，飯長先生のところに見えるお母さんの夫族のように，大変困る男の人が多いし，また女の人の場合には，育児だけを頑張ろうとしたところで，それがなかなか担え切れないで破綻してしまうという問題が起こって，あるいは子どもを育てた後はもぬけの殻みたいになってしまう女の人が増えている。二分法で，男の人はパンツ，女の人はスカートというやり方で，ちょうど女の人はウチの中，男の人は外でというやり方が，最適性をもっていた社会ではそれがうまくいっていたけれど，それが崩れてしまった。しかし，それはまだ惰性の上で続いている，あるいはやむなく続いているために，こういう破綻がきていると私は見ています。それを変えていくことが，個人にとっても，幸せにもつながるし，家族というものも，ある意味での機能が果たせるのではないかというふうに思っています。

その意味で，どういう特性をもった人がセルフエスティームが高いか，そして人間として色々なことが出来るということよりも何よりも，セルフエスティームをちゃんともっているということが非常に重要だと思います。そのことに関連する研究を少しずつ始めております。まだ女の人のデータしかないのですが，女性に関する限りでは大学生も，大人も，結婚した女の人も，かなり年配の女の人も，全て，女性性を高くもっていることは何ら，自尊性には関わりがないのです。つまり，かつてなら，例えばあの人は素晴らしい女の人だ，女らしい良妻賢母だと言われた人が，外からも高く評価され自分も誇り高くいられたであろうけれども，そういう特性は今，何の関係もセルフエスティームとはないのです。それよりも男らしいと考えられた特性，例えばリーダーシップがあるとか，指導力がある，決断力がある，実行力がある，という特性をもっていることが女性の中でのセルフエスティームと結び付いている。段々にそういうふうにジェンダーの壁というものが崩れていかないと，それぞれの人が，セルフエスティームがもちにくくなってくるのではないか。だから逆にいうと，男の方については私はまだデータをもっていませんけれども，予想としては，今のところは男らしい人が男として立派だと思っていらっしゃるかも知れないけれども，例えば濡れ落ち葉とか，燃え尽き症候群とか，粗大ごみといわれる人々はつまり女性的な，例えば家事能力とか，情緒的な共感性というというものがないから駄目だと言われる。「駄目だ」と人から言われたら自尊心なんてなくなる，そういうふうなことになっていくのではないかなというのが，私の，予想でもあり，これからの発達の課題というふうに思っているわけです。

花沢：今，柏木先生のお話をうかがって，ひょいと思い出したことがあります。１週間程前なのですが，山の手線でスカートを履いた男性，おそらく高校の上級生か大学の１，２年生くらいと思われるのですが，そういう男性に会いました。はじめは男だと思っていました。男の子がそばにいるなと思って，ちょっと下の方を見たらスカートを履いているのですよ。えっと思って上の方を見たら，どう見ても男の子なんですね。もう，こういう人が現れたんだな，と思いました。お母さんと一緒で，お母さんは女性のスタイルだったのですけれども。お母さんのスタイルと非常によくにたスタイルをしている。スカートのは履き方が非常に上手といいますか，板についているのです。これからこういう人が出てくるんだなと思って見ていました。話し方もどうも，いわゆる従来の女性的な喋り方でした。しばらく見ているうちに私は，なんか一種，非常に安心した気持ちといいますか，こういう人と一緒にいると安心だなという感じをもちました。そのかわり，全部がみんなこういう人になったら，とても地球の上には住みにくいな，という感じもしました。だから，またそこで私は，自分の父性・母性の考え方について，やっぱりしばらくは，この俺の考え方をもうちょっと修正しないでいこうかなと実感しました。

質問者２：産業医科大学の深田と申します。先生方のいいお話を聞かせていただきましてありがとうご

ざいました。今母性だとか父性だとか言われますけれど，つまり子ども達が発達するにしたがって母性の必要性，あるいは父性の必要性というのが絶対なければいけない。そして，ある時期になって両方のコミュニケーションが必要だと。それで，例えば妊娠している時には母性の責任である。それは父性もある程度，結局，自分の奥さんに対しては，情緒的な面も必要であると思いますけれど，やはりそれぞれ，例えば男性，女性のホルモンがまず違うということ。そのホルモンの特性をまず生かして，母性の必要性，父性の必要性というのは，ある時期までは，つまり発達段階においてそれをしなくてはいけない。それで，やはり子ども達の子育てをする，あるいは教育をするうえで，今，結局母親が中心になってやっている。あるいは父親はなんとなく会社の方に向いているというようなお話ですけれど，これはつまり子育てをするうえで，いつ頃父親が出てこなくてはいけないか，母親はいつ手を引かなくてはいけないのかということをお互いに忘れつつあると。それは全体的に出す必要があるのではないかと。それで特に先生達のお話を聞きたいのですけれど，例えば男の出番がいつ頃が一番必要か，もし思っておられれば，というか，いつ頃から早く発達をしなくてはいけないか，父親として，ですね。私は3歳から男の出番だろうと思っております。教育上からいえばですね。先生達のご意見をちょっと聞かせていただければと思っております。

柏木：私は最初から両方いるというふうに思っております。3歳までがお母さんであることの根拠は全然認めませんし，それから，今お母さんだけが抱えているという問題性を非常に感じますので，なるべく多様な価値，多様な人からの刺激が最初から必要だと思っております。

質問者2：〈マイクが届いてなかったため，冒頭の部分は録音されていない〉

3歳にかけて，やっぱり出番がですね，父親がたくさん出てくれば，母親はもう身を引くとかいうことではなくて，比率的な面が出てきてもいいのではないかと思っております。

司会：最初からではなくて，途中から出番が必要というわけですね。

質問者2：そうです。結局，やはりもう妊娠するということは，両方とも，力が必要ですからね，絶対に片親だけでは出来ませんから，両方の，結局，男性・女性の力が必要ですから，それは絶対に，見逃してはいけない。そして，やはり，そこにまず母親の方に妊娠しますからその力といいますか，そりゃ夫の力も十分に必要です。つまり，その情緒的な面は夫から支えることによって母親がどのように子育て，妊娠するかというか，これは相当影響を受けます。事実，例えば…。

飯長：ちょっと教えてください。そこで言う母親が必要とか父親が必要とか，母性とかが大事だとかとおっしゃるのは，どういう内容のことをおっしゃっているのでしょうか。

質問者2：つまり，例えば子育てをするうえでですね，結局，情緒面，あるいは知性面，性格面とか，そういう面もそうだろうと思っています。

飯長：子どもとの距離の問題でいえば，例えば子どもが小さい時には，授乳するといったって，こうやって授乳する人は，やっぱりいい授乳の仕方とは思わないでしょう。家を出る時ね，「乳のない父は出ていくよ」とかなんとか言うんですけどね。つまり，私は乳房はありませんけれど，でも例えばこうだっこして哺乳びんでやる。ある種の研究データ，私自身あまり見たことはないのですが，子どもとの距離の近しい，Significant Otherといわれる人が必要かということでいえば，相当近しい，体温が感じられる距離というのは，おそらく色々類人猿等の研究等も含めて，一定程度言えるかなと思います。ただ，それが，いわゆる母性といわれるものなのか，あるいは，まして女性，母親が必要だという話になるのかどうかということになると，私はあまりそういうふうには思っていません。

花沢：それは今おっしゃったように，私も，男であろうと女であろうが，やはり子どもと接する時の目と目との接触が大切だと思います。生まれた時もそうですし，人間が亡くなっていく時もやっぱり目線を合わすということなのですね。ですから，そういう面においては，別に母性であろうが父性であろうが，みんな同じ人間ですから，そういう意味で，3歳までは母性とかいうように限定出来ない。最初から父母が同じようにスタートしていって，それはお母さんが果たす役割は多い場合もあると思いますし，父親の果たす役割も多い場合もあると思いますけれども。特に青年期に達します時には，私はよく思う

のですけれども，中学になった12歳の子どもに対しては，親はやっぱり12歳になってほしいということなんですね。ということは，子どもが12歳になっているにもかかわらず，親はいつも７歳ぐらいを相手に対応しているというようなことで色々な問題が出てくる。ですから，発達というのも，親は親として，子どもが成長するに従って親も発達していくことが大切と，いつもそのように思っているのですけども，いかがでしょうか。

柏木：今日そんな話までくると思わなかったものですから，データを持ってこなかったのですけれども，まだ予備的な段階ですが，日本とアメリカと，アメリカにいるジャパニーズアメリカン，日系のアメリカ人，その三つの，３グループの青年達がどういう支援の人達をリソースパーソンとしてもっているか，例えば将来のことを相談したい時は誰に相談したいか，ほっとしたいのは誰としたいか，買い物に行きたいのは誰か，恋愛問題を話したいのは誰かというふうな青年期の課題状況に応じてどういうリソースパーソンをもっているか，ということを今，比較研究しつつございます。そのリソースパーソンとして，あらかじめ父親，母親，同性の友人，異性の友人，それから兄弟，の５人を出して，前述のような色々な状況ごとに誰を求めるか，ということを調べた。

私どもの予想としては，青年期ですから，全般的にすれば友人が非常に高くなるだろうけれども，ものによってはお母さんであったり，こういうことであったらお父さんというふうにdifferentiationがあるだろうというふうに予想しておりました。そうしましたところが，アメリカ人とアメリカに住んでいる日系のアメリカ人，これはほとんどが英語を話す人達ですけれど，その人達と日本の青年と非常に違う点が一つあります。それは何かというと，お父さんというのが何事にも求められないというのが，日本のお父さんの特徴なんですね。これはいろいろと解釈できると思いますが，要はあてにされてないということ。これはどういうことかというと，やはり，出番になって出てきても駄目だということではないでしょうか。やはり任せたぞと，さっきも飯長先生がおっしゃった「任せてるんだから」という土壌でずっときていて，さあ俺の出番だといったって，もう求められない，ということにもなりかねない。やはり，それは関係性というのは長い期間をかけて，育っていくものだと思いますのと，それから，育児というのは，もちろん人間の種として決まっている部分もあるけれども，人間の育児は他の動物と違って，やはり文化だということ。だから，状況が変われば，どういう育児がいいかということは当然変わらなければいけない。それが今，変わりつつある時。お母さんだけが育てるということの問題性の方が，今大変クローズアップしていると思います。それよりも，お父さん自身のためにも，子どものためにも，もっと多様な刺激や価値が小さい時からある。そういう意味でも，青年期になっても，顧みられないお父さんではない，やっぱり家族の中にも根をもつお父さんであるためにも，小さい時からの役割は，非常に重要だというふうに思っているわけです。

質問者３：日本女子大学人間社会学部心理学科３年の加藤と申します。柏木先生へ質問があります。先生の話された中で，データの中に，子どもは自分の分身であると思うのは，母親よりも父親の方が高いとおっしゃっておられましたけれども，母親の問題にも関わってくると思うのですが，母子共生と，また母親が自分を異物と思う，そのことの関係性や，また逆に父親が子どもを自分の分身だと思う度合いが高い中にあって，子どもの自立において父親の存在の重要性などというのは，先生はどのようにお考えになっているのでしょうか。

柏木：全部お答えできるかどうかわかりませんけれども，私がこの子どもに対する感情というものについて，お父さんとお母さんがどうであろうか，何が要因かということに関心をもった一つの根は，こういうところにございました。

だいぶ前に，日本の子どもとアメリカの子どもの発達，及びその母子家庭環境に関する比較研究を長いことしておりました。日米の親子関係の研究というのはあまたありますが，そういう研究でも，それから私共の研究の中でも，例えばアメリカのお母さんと子どもの関係と，日本のお母さんと子どもの関係は確かに違います，その時よく説明として出されるのが，“母子一体感”ということなのです。例えば，お母さんと子どもが，アメリカのお母さんだったら，子どもが眠ってしまえば遠くに行ってしまうのに，日本のお母さんはいつもそばにいる，というようなこと。あるいはコミュニケーションスタイルの場合に，アメリカのお母さんは非常にきちんと話をする

けれども，日本のお母さんは大変曖昧な形で相手にアピールして，わかりあえてしまうというふうなことから，共生的な関係だということをいって，日本は母子一体だというような説明がよくなされました。

私はその研究のチームに入っておりまして，その話が出る度ごとに，「私もこれでも親のはしくれなのにあんなこと言われちゃあかなわないな」なんて気持ちを非常に強くもっておりました。お母さんは子どもと一体だなんて言われてはかなわないという気持ちを非常に強くもっていた。それは，なぜかと申しますと，先程の花沢先生のお言葉でいえば，接近と回避，回避ではないのだけれども，お母さんというのはいつでも分離したいという気持ちを，それから青年期になったら分離しなければいけないのですけれど，それに先立つ小さい子どもの時でも，お母さんというのは分離する，したいという気持ちを常にもっているのです。最近，ある所で，ちょうど育児中のお母さんに対して話をする機会がありました。一体，みんな何が問題と思っているかを端から聞きましたところが，共通項は，自分の時間がもてないということなのです。そして，他の調査によると，今，子どもをもっているお母さん達が何が一番困っていることかというと，子どもが寝てくれない，夜中に起きるということ。つまりそれはどういうことかというと，自分というものと子どもというものの対立を，大変深刻に感じている。そして，ご覧いただいたように，日本のお母さん達は子どもはかわいいと思う，かわいいと思うんだけれど，やっぱり，自分というものの認識が非常に強くなっている。例えば，個人としての時間をもっともちたいなど。そういう意味では，子どもというのは，どう考えても自分の一部とは考えられない。やはり自分にちくちく刺す，対立する，そういうものだと考えざるを得ないとデータを解釈しました。

そのマイナス面がやたらに大きくなるのはやはり問題ですね。それがどう緩和されるかというと，さっきは説明しませんでしたけれども，そのお父さんが子どもとの関係を強めていくと，お父さん自身も変わる，そして母さんのネガティブな気持ちが減るんですね。コミットする群「H群」というふうに書いた群では，子どもへの分身感が減る。つまり，子どもを育てることに関わっていると分身だなんて思えない。やっぱり違うんだということを思うと同時に，しかし，そういうふうに一緒に担うことによってお母さん自身の，その回避的な否定的な感情は減る，ということが出ています。そういう点でも，私はやはりお父さんの役割というのは非常に大きい，お父さん自身にも重要だし，関係としても大事だと思っております。そんなことでよろしいでしょうか。

質問者 4：立正大学の文学部哲学科心理学コース３年の中村と申しますけれども，飯長先生に質問がございます。先生のお話では，母親の態度が変容するということでうかがったのですが，父親に希望することということで，多様な価値観，情緒面でのサポート，あと生きがいをもってほしいということだったのですけれども，父親がこのように，要求されなければいけなくなってしまったのは，男女の別が根本的な原因にあって，伝統的な男性としての価値観が父親に根づいているということに結び付いているような気がするのですけれども。柏木先生のお話にもあったように，やはり男女の機能が接近していることによって，父親が社会に対応出来ていないということにも結び付いているとも思うのですけれども，そこで，そのように出来ていった父親の価値観はとても変わりにくいものだと思いますが，母親の態度が変容した時に父親の態度が変容しうるかということを疑問にもちました。もし変容するとすれば，どのように変容するのかということを，もし事例がありましたら教えていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

飯長：放っといても，父親の価値観は変わらないと思います。そういうことを言える機会を今あなたが作ってくださったので非常に有り難いのだけれど，帰るまでに言わなければならないと思っていたのですが。

一つは，そのお母さんがさっき言ったように自己主張をして，「私だけがなんでこんなに苦労しなきゃいけないのか」，「なぜ私だけがこんなふうに責められなければいけないのか」，そのお母さんが責任を回避するということではなくて，一緒に責任を担おうじゃないかという形のメッセージを，お母さんが死ぬほどの思いで言った時に，お父さんは変わりうるということを言っているわけです。だからやはりその人の人生なり生活なりを賭けたメッセージが，関係の中で，人を動かすのだと思います。それでも，夫婦でやっていきたいとか，この二人のペアで幸せ

になりたいとなれば，その中で今まで譲らないできたものでも，譲るしかないと。変わるというのはそんな喜んで変わるものではないわけです。ものすごく苦しいのです。変わった後は気持ちいいって，ちょっとマゾヒスティックな言い方をしますけれども。本人の許しを得てちょっと今日お話ししますけど，福丸さんという私の所で今修士論文を書いている女性が，父親の研究をしています。それはお父さんの育児参加の研究をしていて，彼女の元々の問題意識でいうと，お父さんの価値観というか，例えば仕事をどういうふうに思うか，自分の人生にとって仕事の重みをどう考えるかとか，それとの関係で子どもとのさっき柏木先生が少しおっしゃったような意味での子どもの意味とか，そういったものと，その育児参加が関係あるだろうと思っていたわけです。つまり，自分にとって仕事も大事だけれど家事も大事だみたいなことを言う人，育児も大事だなんていう人は，やはり育児参加度は高いだろと考えたのですけれど，結果が出ないのですよ。結局何が今のところ出ているかというと，お母さんが有職か無職かで影響があったのです。以前，柏木先生，牧野カツコ先生達と一緒に父親の研究会をやっていました。そこでは，お母さんが職業をもっているかどうかということが，お父さんの育児参加に影響があったのです。意識そのものは放っといて変わるわけではない。やっぱり生活の必要，それはパートナーがどう生きたいかとか，経済的な必要とかあるかも知れない。社会の変化によって，そういう消費生活の中で共働きしなければ東京ではやっていけない。非常に小さいデータのように見えるのですけれども，非常に示唆があるなと思いました。

柏木：福丸さんにご相談を受けて私も話をしたのですが，先程の私のデータでも，お母さんの有職・無職で分けると，明らかに違うのですね。先程H群とL群というのを出しましたけれど，L群というのは概ねは無職，専業のお母さん。つまり，私が何でも引き受けるわという態度をとっている。それは了解の上でとっているのでしょうが，そういう層では育児感情がネガティブな結果になっているということがあります。職業をもっているかどうかということは，やむなく，迫られてするようになるということもあるかも知れないし，またそれ以前にそういう人を配偶者に選ぶという価値観を既にもっているということもあるかも知れないのですが，価値観の水準でも明らかにその二つの層は違います。

では，何がそれを変えるかということは大変難しいことですが。最後に近いので，乱暴な言い方をしますと，今日本に補償教育がいるとすれば，そういう教育かなと思ってもいます（笑）。補う教育。ちょうど入学前に学力が足りないから，何か補ってやるという教育がアメリカでされましたね。あれと同じようなこと，何をするべきかというと，男性に対する教育が補償教育として必要だというふうに思っているわけです。

司会：まだまだあるはずでございますけれども，予定が4時半。今日は本当に大勢の皆さんにお集まりいただきまして，まだまだ続けなければならない問題かと思いますが，この父親の，先程飯長先生がおっしゃったように，価値観はなかなか変わらない。しかし，平成7年度から，ご承知のように高等学校で家庭科が男女共習になったわけでございますね。そのへんから多少，まあこれからの若い世代の方はどんどん変わっていくのではないかと，大いに期待している一人でございます。

とにかく今まで色々なところで指摘されております現代の父親の欠点というのは，どうもその，昔は地震，雷，火事，親父と言っていましたけれど，今はとんでもないですね。親父はどこへ行ったのか，さっぱりわからない。もう子どもの相手にもならない。叱ることもできない。そういうことで，段々と父親というものが最近見直されるような時代になってきたわけでございます。

貴重な時間でございましたけれども，なんのまとまりもなくて，司会者として非常に心苦しいのでございますが，最後までご静聴いただきまして誠にありがとうございました。これで閉会にさせていただきたいと思います。先生方，どうもありがとうございました。（拍手）皆さん，どうもありがとうございました。